



## インドはなぜロシア非難決議に棄権するのか

理論研究部長 伊豆山 真理

### NIDSコメンタリー

第 212 号 2022 年 3 月 31 日

ロシアのウクライナ侵攻に対して、国連安全保障理事会（以下安保理）では、2022年2月25日、これを憲章2条4項に反する行為と認定して、武力行使の停止と軍の撤退を即時に求める決議が採決に付された。ロシアの拒否権によってこれが否決されると安保理は、国連総会の緊急特別会合開催を求める投票を行った。3月2日、緊急特別会合が開催され、ロシアに対して即時に無条件かつ完全な撤退を求める決議案が、全国連加盟国191カ国中、賛成141カ国で可決された。

2021年から安保理非常任理事国であるインドは、これら3つの決議全てに中国と並んで棄権の投票を行った。日米のパートナーであるインドは、近年日米豪印の協力枠組（QUAD）にも積極的に関与している。そのインドが米国からの働きかけにもかかわらず<sup>1</sup>、棄権票を投じたのはなぜか。

#### ウクライナ侵攻に対するインドの立場

インドはウクライナ侵攻を擁護しているわけではない。国連安保理で棄権票を投じるに際してティルムルティ国連大使はインド政府の立場を表明しているが、それは以下の4点にまとめられる。

- ①ウクライナにおける事態の推移に憂慮し（disturbed）、全ての関係者に暴力と敵対行為の即座の停止を求める。人命を犠牲にした解決はあり得ない。
- ②ウクライナのインド人コミュニティの福利と安全（welfare and security）も懸念<sup>2</sup>。
- ③今日のグローバルな秩序は、国連憲章と国際法、主権と領土の一体性の尊重を基礎としており、全ての当事者にこれらの原則へのコミットメントを求める。
- ④対話のみが解決の道であり、外交交渉に戻るべき。

「人命を犠牲にした解決」という表現、あるいは「国連憲章、主権の尊重」には、ロシアに対する最大限の批判と抑制の要求が込められている。しかしこれを越えて「ロシア」を名指しで対象とする決議に賛成することは、インドには不可能であった。

#### 印パ紛争とソ連の拒否権行使

インドは、インド亜大陸におけるパワーバランスを自らの有利に維持するために、ロシアの支援を必要としている。ここで「インド亜大陸」と限定する理由は、インドの大陸国家としての地政学に焦点を当てるためであり、陸の国境を接する直接的な脅威であるパキスタン、より長期的な脅威である中国に対抗するために、ロシアの外交的・軍事的支援が不可欠であることを強調するためである。海洋国家として

<sup>1</sup> 米務長官から印外相への働きかけがあったと見られる。Department of State, Secretary Blinken's Call with Indian External Affairs Minister Jaishankar, February 24, 2022.

<sup>2</sup> 医学部留学生を中心とする18,000人のインド人が取り残され、その安全な退避のためにインド政府は大規模な退避作戦を行っている。

のインドは、米国、日本、そしてフランスなどとも多くの利益・価値を共有しているが、これらの諸国は、印パ間のカシミール問題や中印国境問題に関して、ソ連／ロシアのように明確な軍事的・外交的支援を提供するわけではない。インド・ロシア関係は、2021年12月に訪印したプーチン大統領とモディ首相の間で発出された共同声明にも「長期の試練を経た (long standing and time-tested)」関係とされている<sup>3</sup>。「長期の試練を経た」には、2つの意味がある。1つは、国際紛争における相互の立場を調整してきたことであり、もう1つは兵器の継続的供給である。

インドが最も評価するのは、国連安保理におけるソ連／ロシアの拒否権行使である。1948年から65年までの間に「インド・パキスタン問題」として15本の安保理決議が成立しているが、このうち1957年と62年の2回にわたりソ連が拒否権を行使しており、65年以降インドにとって受け入れ不能な条項を含む決議案の提出を抑止する効果があった<sup>4</sup>。

ソ連の拒否権行使と軍事支援は、1971年の第3次印パ戦争（バングラデシュ独立戦争）におけるインドの戦争遂行を大きく助けた。第3次印パ戦争は、米中和解とリンクしていた。71年7月、キッシンジャー補佐官がニクソン大統領の特使として北京入りしたことが発表されると、ソ連とインドは急遽「平和友好協力条約」を締結した<sup>5</sup>。インドにとってこの条約は、中国が来るべき印パ戦争に介入することを阻止するための備えであった。条約交渉にあたったカウル外務次官は、戦時にソ連が「モンゴルや極東の中ソ国境に、中国軍を縛り付ける」ことが期待できると述べている<sup>6</sup>。ソ連側も、米国と組んだ中国が南アジアに影響力を伸長することを阻止するため、インドを全面的に支えた。パキスタンの空爆によって正規の戦争状態に入った翌日の12月4日、安保理が緊急開催され、米国、英国、日本、アルゼンチンを含む9カ国が武力行使の停止を呼びかける決議案を提出したが、ソ連は拒否権を行使した。その後5日と13日に提出された2つの決議案も、ソ連の拒否権行使により不成立となり、この間パキスタンは降伏に追い込まれた。印パ戦争に関わるソ連の国連外交は、インドに対する停戦圧力を跳ね返し、戦争及び停戦交渉をインド側に有利に傾ける役割を果たしたといえる。

あたかも相互主義を貫くように、インドもソ連／ロシアを非難する国連決議には反対や棄権を投じてきた。冷戦期から現在に至るまでインドの投票行動は、米国よりもソ連・ロシアとの一致度が高い<sup>7</sup>。2014年3月、国連総会におけるクリミア併合を無効とする決議案にもインドは棄権を投じている<sup>8</sup>。

## インドの兵器調達先としてのソ連／ロシア

ソ連からの本格的な兵器輸入は、中印戦争が勃発した1961年に始まる。また、インドが東パキスタン内戦への軍事介入を強化する71年10月後半、インド・ソ連平和友好協力条約9条に基づく協議が開始

<sup>3</sup> India- Russia Joint Statement following the visit of the President of the Russian Federation, "December 6, 2021.

<sup>4</sup> 以下、安保理決議については、<https://www.un.org/securitycouncil/content/resolutions> 参照。

<sup>5</sup> Treaty of Peace, Friendship and Co-operation, August 9, 1971.

<sup>6</sup> Srinath Raghavan, *1971: A Global History of the Creation of Bangladesh*, Cambridge: Harvard University Press, 2013, p. 127.

<sup>7</sup> 2020年の国連におけるインドの投票行動は、米国との一致度39%、ロシアとの一致度80%強であった。Department of State, Report to Congress on Voting Practices in the United Nations for 2020 Section 406 of Public Law 101-246 (22 U.S.C. § 2414a).

<sup>8</sup> "Territorial integrity of Ukraine," Resolution adopted by the General Assembly on 27 March 2014, 68/262. 賛成100、反対11、棄権58（中国、インドなど）、欠席24。

され、インドに対する兵器の緊急供与が行われた<sup>9</sup>。

過去 20 年間に、インドの兵器調達に占めるロシアの比率は低下してきているが、それでも 2020 年の調達の 5 割を占める。また主要兵器がロシア製であるため、中期的にはインドのロシア依存が続くと見られている。例えば陸軍の主力戦車は、その 6 割が T-72、3 割が T-90 である<sup>10</sup>。T-90 については、2019 年 11 月新たに 464 両のライセンス生産の契約が締結されている<sup>11</sup>。中印国境で衝突が生じた 2020 年、前線のインド司令官が、T-90 の山岳地帯や寒冷地での作戦適合性をあげて、「T-90 に中国の軽戦車に勝る」と話していることに見られるように<sup>12</sup>、インド陸軍は T-90 に信頼を置いている。空軍の主力戦闘機も、11 個飛行隊を構成する Su-30MKI である。2018 年に契約が成立したミサイル防衛システム S-400 の取得は、米国からの制裁の可能性があるにもかかわらず、インドは取得を断念するつもりはない。

インドが価格や技術開示などの点で、ロシアから好条件を引き出していることから、ロシア・インド関係は、必ずしも一方的な依存関係ではないという分析もある<sup>13</sup>。ロシアからインドへの長期にわたる継続的な兵器供与が、両国間の相互依存関係の安定性を生み出しているといえる。

### 米中ロ三角関係とインドのバランス感覚

兵器の供給は中長期的には米国やフランスからの調達で代替可能であろうし、主権尊重、領土不可侵の価値を共有しているのに国際社会の多数派と同一の立場を示すことに何の躊躇があるのか、外部の観察者には不可解に思える。しかし、そこにはインド独特のバランス感覚と国際政治観が存在する。

米国とロシアとのバランスに関して、大使経験者らの発言を見てみよう。ラガヴァン元駐ロシア大使は、印口関係と印米関係との間の軋轢は 2014 年に始まったことであり、インドは「両者を切り離す」努力をしてきたと述べている。N. パルタサラティ元大使も、ウクライナ問題への対応は「誰をも不愉快にさせないようなバランス」を考慮し、「彼らの信頼を維持するように」努めなければならないと述べている<sup>14</sup>。つまり、インドは印米関係と印口関係を「切り離し（ディカプリング）」すべきであり、またそれが可能と信じている。ジャイシャンカル外相が、「インドの政策オプションに関していかなる国にも拒否権を渡してはならない」と述べているように<sup>15</sup>、インドは容易に多数派に追随したり、米国の説得を受け入れたりしない。そしてこのような、「バランス」に配慮した「慎重」かつ「微妙」な政策は、おおむね野党にも受け入れられている<sup>16</sup>。

インド独自のバランス感覚の背後には、2つの要素が存在している。第1は、ロシアの勢力圏認識に対する共感である。少なくともウクライナ侵攻の直前までインドは、NATO の東方拡大に反対するロシアの主張への理解を公に示していた。例えば 2014 年、クリミア議会が住民投票を決定した当日、メノン国家安全保障顧問は、「ウクライナ内部の問題が平和的に解決され」「より広くさまざまな利害の妥協がはかれる」ことが望まれると述べ、その「さまざまな利害」の1つとして、「ロシアの正当な利益」

<sup>9</sup> Raghavan, 1971, p. 226.

<sup>10</sup> IISS, *The Military Balance* 2021.

<sup>11</sup> *The Diplomat*, November 12, 2019.

<sup>12</sup> *Times of India*, October 3, 2020.

<sup>13</sup> Congressional Research Service, “Russian Arms Sales and Defense Industry,” *CRS Report*, R46937, October 14, 2021.

<sup>14</sup> *Indian Express*, February 25, 2022.

<sup>15</sup> S. Jaishankar, *The India Way: Strategies for an Uncertain World*, HarperCollins, 2020.

<sup>16</sup> *The Hindu*, March 3, 2022.

を明言していた<sup>17</sup>。インドの外交関係者の中で NATO の東方拡大がロシアの「正当な安全保障利益」を犯しているという観念は共有されていたとみられる。ジャイシャンカル外相も、今回の侵攻直前の 2 月 23 日、フランスのシンクタンクが主催する会議において、「ウクライナ問題は、冷戦後の NATO 拡大、ロシア・欧州関係のダイナミズムといった 30 年間の経緯の連鎖によるもの」と述べている<sup>18</sup>。

ロシアの勢力圏認識に対するインドの共感、米国の同盟国パキスタンと対峙してきた自らの経験に導かれている。1954 年、パキスタンが米国との相互防衛援助協定を締結すると、ネルー首相は、「もはや彼ら（米国）を中立的とみなすことができない」として、パキスタンの軍事力が「外部から追加された」ことに対する反発を示した<sup>19</sup>。冷戦期を通してインドは、米国の同盟政策が「アジアの軍事バランスを変える」ことに対する警戒を保持し続けてきたのである。

インド独特のバランス感覚を支える第 2 の要素は、米国・中国・ロシアの大三角関係と、ロシア・中国・インドの小三角関係を連関させる地政学的世界観である。ここでは、中国がインドに対して敵対的行動に出るか否かを規定するのは、米国・中国・ロシアの三角関係であるとされる。そこで、インドの取り得る手段として、ロ・中・印の小三角関係を利用して、米・中・ロの大三角関係を整形し、中国の行動を規制することが追求される。

ウクライナ問題におけるインドの行動は、2 つの三角関係から説明できる。インドが懸念するのは、仮にインドが米欧とともにロシア非難の立場を明確にすれば、大三角形における中口の関係強化が、小三角形に影響を及ぼす可能性が高いことである。中口の連携が、亜大陸とりわけパキスタン、アフガニスタン、ミャンマーにおいて、インドにもたらす負の影響は明白である。一方、インドがロシア支持を明確にした場合、米国が中国からの支持調達に動き、米中連携が強まることが想定されており、これはインドにとって最悪のシナリオである。サラン元外務次官は、「米国とロシアのいずれの支持も得られぬままに中国と対峙すること」への懸念を強く訴えている<sup>20</sup>。

米・中・ロ三角関係を決めるのは価値やイデオロギーではないということを、第 3 次印パ戦争と米中和解の過程から学んだインドは、価値のみに立脚した政治的立場表明は行わないであろう。それでもウクライナ問題をめぐるインドの議論には、長期的な中国との対立・競争が強く意識されており、米国、欧州、あるいは QUAD の側に静かにスイングする余地は残されている。 (2022 年 3 月 18 日脱稿)

## プロフィール

profile

理論研究部長

伊豆山 真理

専門分野：南アジアの安全保障

本欄における見解は、防衛研究所を代表するものではありません。  
NIDS コメンタリーに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。  
ただし記事の無断転載・複製はお断りします。

防衛研究所企画部企画調整課

直 通：03-3260-3011

代 表：03-3268-3111（内線 29177）

F A X：03-3260-3034

※ 防衛研究所ウェブサイト：<http://www.nids.mod.go.jp/>

<sup>17</sup> *The Diplomat*, March 8, 2014.

<sup>18</sup> *Tribune*, February 22, 2022.

<sup>19</sup> Ravinder Kumar and H.Y. Sharada Prasad, eds., *Selected Works of Jawaharlal Nehru*, Second Series, 25, Jawaharlal Nehru Memorial Fund, 1999, P. 343.

<sup>20</sup> Shyam Saran, “Three is a crowd: US did a China on Soviet Union in 1972; Now, China is Doing a Russia on America,” *Tribune*, February 25, 2022.